

令和 2 年 5 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05564・19K20774

研究課題名（和文）17-18世紀フランスにおける像理論と身体言語

研究課題名（英文）Image theory and body language of the 17th and 18th Centuries in France

研究代表者

川野 恵子（Kawano, Keiko）

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：40639853

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：17-18世紀フランス演劇における身体言語の理論化をリードしたメネトリエとディドロは、それぞれ独自の像理論の一部として演劇論を展開したという共通点に着目し、両者を連続的に考察することで、身体言語論の新たな文脈に光を当てること試みた。メネトリエにおいては「表徴」概念、ディドロにおいては「ヒエログリフ」概念に認められるとおり、両者の像理論に共通しているのは、原像と模像の差異を見抜く、あるいは像の表象対象そのものを感覚するといった観者の能動性に焦点を合わせた点である。身体像を言語とする身体言語論へ寄せた両者の関心の背景には、言語の話者と受け手のより相互的なコミュニケーションの追求が認められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

17-18世紀フランス演劇における身体言語興隆について、同時代の言語起源論や古代修辞学復興などのこれまで指摘されてきた思想的背景に加え、本研究は演劇領域それ自体において身体言語の問題に取り組んだメネトリエとディドロという二人の思想家の理論を検討することで、言語コミュニケーションにおける話者と受け手の相互性の追求という新たな文脈を指摘した。以上の成果は、ダンスによって物語ること、あるいは創造性と開かれた解釈に価値を置く芸術作品に特異な言語活動について解明する一助となる。

研究成果の概要（英文）：Body language in seventeenth- and eighteenth-century French drama arose within two major contexts: the revival of the ancient rhetoric and theories on the origin of language. This study attempts to shed light on another aspect of its background by examining the theories on image by Menestrier and Diderot. Although rarely discussed together, it is in their pursuit of the image that they share the lead in theorizing dramatic body language. As shown by Menestrier's concept of "figure" and by Diderot's "hieroglyph," both their image theories commonly focus on the viewer as an active participant. That is, according to their theories, the image prompts viewers to find the difference between the original and the copy or to sense themselves as the object itself represented by the image. Their interest in the theories of body language is, therefore, based on the pursuit of an increasingly mutual communication between the speaker and receiver.

研究分野：美学

キーワード：身体言語 像理論 感性的認識 ディドロ メネトリエ/メネストリエ 視覚言語 演劇 ヒエログリフ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、17-18 世紀フランスの演劇における身体言語興隆の背景として、同時代の言語起源論や古代修辞学復興が指摘されてきた。一方で、演劇領域において身体言語の問題に取り組んだ思想家を注視すると、17 世紀に劇(théâtre)としての舞踊理論の端緒を開き、18 世紀「バレエ・ダクシオン」運動を用意したイエズス会修道士メネトリエ (C.-F. Ménétrier, 1631-1705) は、舞踊論の他に、エンブレム論やヒエログリフ論を著し、それらを「像の哲学 (*Philosophie des Images*)」と総称した。さらに演劇におけるパントマイムについて、実践、理論の両側面から取り組んだ 18 世紀のディドロ (Denis Diderot, 1713-1784) は、演劇論に注力する数年前に『聾啞者書簡』(1751 年)を著し、感覚による認識や表象を理論化、それをエンブレムないしヒエログリフと称した。つまり、この二人は、知性とは別に機能する感性的認識・表象活動全般への哲学的探求(以後便宜上「像理論」とする)の連続において、17-18 世紀の演劇領域における身体言語の理論化をリードしたことになる。

むろん同様の認識論は同時代に数多著された。ただし両者はともに像理論の実践を、「演劇」というフィクションの場に求め、18 世紀フランス演劇の身体表現の興隆に深く関わったという共通点を看過することはできない。つまりこの二人は像理論の実践を、現実における知性的認識活動とは区別したことになる。これは、抽象概念の正しい伝達を到達点とする進歩史観に基づく言語起源論とは異なったパラダイムにおいて、身体による言語活動が原理的に論じられていた可能性を示す。ここから次のような問いが生まれる。17-18 世紀フランスにおいて、知性主義に包摂されない新たな言語理論が連続的に論じられていたのではないか。そこでこの二人の像理論を連続的に読み解くことで、なぜ感性的な認識と表象は劇の言葉あるいはフィクションの言葉として実践されたのかについて原理的に考察し、思想的系譜の諸相を示すことが着想された。

2. 研究の目的

本研究課題「17-18 世紀フランスにおける可感的言語体系の成立 身体言語と創造性」は、17 世紀メネトリエと 18 世紀ディドロの哲学において、身体言語の問題に取り組む劇論が、ともに感性的認識を主題とする「像(image)」理論の一つを成していたことに着目する。これまで劇における身体言語の興隆の背景として、修辞学復興ないし言語起源論が言及されてきた。しかしこれらの観点において身体言語は、抽象概念の正しい伝達を到達点とする知性主義言語活動の副次的存在にすぎない。本研究はむしろ、像理論の分析に基づいて、身体言語に固有の言語機能がどのように積極的に評価されているのかを明らかにし、身体言語という主題の中で、知性主義に包摂されない新たな価値を持つ言語体系が形成されていたのではないかと考察することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、演劇領域における身体言語の興隆をリードした 17 世紀メネトリエ、18 世紀ディドロの著した像理論のテキスト研究に基づいて、1) これら像理論において像の指示機能はいかに定義されているのか、2) 以上の定義は、身体言語(視覚言語)の問題にいかに応用されているのか考察するという二つの考察点を設定し、それぞれ分析するという方法を取る。本課題遂行にあたり、現在出版されていないメネトリエのテキストや数々の校訂版を持つディドロのテキストを参照する必要がある。そこで、これらテキストの大半を所蔵するフランス国立図書館を主たる研究場所とし、調査を行う。成果については、研究発表の上、雑誌論文に投稿する他、アウトリーチ活動を行い、広く社会に公開する。

4. 研究成果

メネトリエ

メネトリエ (1631-1705) はリヨンのイエズス会コレージュにおいて、神学及び人文学の教育・研究に従事した修道士である。劇としての舞踊を定義する舞踊論『劇の諸規則にしたがう新旧のバレエについて』(1682 年)を著し、これはとりわけ 18 世紀バレエ・ダクシオンの理論家に参照され、大きな影響を与えた。メネトリエは、舞踊論の他に紋章論や音楽論を著し、それら一連の著作は「像の哲学」と総称された。本課題はイエズス会修道士であるメネトリエが、神という原型と像を結び、原型と像の絶対的ヒエラルキーを重んじる神学的な伝統に身をおきながら、世俗的な像を「気晴らし」として積極的に認めた点に着目し、メネトリエはどのように神学的伝統と対峙し、神に依拠しない像の自律的な価値の論証に至ったのか分析することで、その像理論の解明を試みた。

メネトリエは宗教的な目的を持たない世俗的な像を「気晴らし」として肯定したが、この「気晴らし」は、メネトリエの属するイエズス会と激しく対立したジャンセニストによってとりわけ厳しく糾弾された。そこで比較検討のため、ジャンセニストの像理論にあたったところ、とりわけパスカル (1623-1662) の「表徴 (figure)」理論と呼ばれる一種の像理論のなかに、メネトリエの像概念を読み解く鍵を見出した。

パスカルに関する先行研究を調査した結果、神学において、現世を神の隠れる象徴的謎と解釈する伝統的な思想があった。さらに 17 世紀においては、謎を成す地上と天空の象徴関係が、旧約聖書と新約聖書の象徴関係に読みかえられ、これは今日にはほとんど消滅したこの時代に独

特の「表徴 (figure)」概念を作り出した。その表徴概念とは、旧約聖書に描かれる出来事は、新約聖書の出来事の預言であり、旧約は新約の「表徴」だというものである。とりわけパスカルはこの概念をキリスト教の証明のために重用し、さらに絵画の図像の存在論に結びつけた。パスカルにおいて、「原物」の写しである「図像 (figure)」と未来に起こる神の出来事を間接的に指示する「表徴 (figure)」とが存在論的に不完全なものとして同一視されたからである。

西洋の伝統的な像理論「自然模倣論」、あるいはメネトリエの思想的背景としてしばしば指摘される「神人同形論」どちらにおいても、像とは、原像に限りなく接近し、原像を明晰に表すことを使命とする。しかしこの17世紀の表徴理論は、表すというよりはむしろ、「隠す」という特異な像の在り方を示す。闇昧に隠すというこの思想は、メネトリエの像理論の根本的な解明を促した。メネトリエは1694年の『謎めいた像の哲学』のなかで、まさに表徴理論を論じ、隠匿するという神学的像概念の影響下にあることを示す。しかしメネトリエは、パスカルのように像を原像と比較して存在論的に不完全なものとはみなさない。そうではなく、隠匿する像概念のなかに、表されるもの/神と表すもの/像の間に類似というよりは差異を作り出して隠そうとする制作者の巧妙な「精神」と「技」を認め、この隠す「精神」と「技」が像の成立の要因であると定義した。つまり、メネトリエは神と像の間の絶対的ヒエラルキーを、原像と模像の差異を際立たせる作者に焦点をあてた像理論へと組み替えることで、像の価値を、原像ではなく、像を制作する者の精神と技術へと位置付けた。このようにしてメネトリエは、神に依存しない像の自律的価値を論証することに成功した。

本研究の結果、メネトリエの像理論の基盤には、像は神を隠匿するという当時の神学の伝統的な思想があり、対象を隠匿する精神と技を像の成立要因として応用していることが明らかになった。この分析は、メネトリエや当時の身体言語論の解明に新たな視点を与えた。17世紀の絵画論において、徐々に人間の顔の表情や身体の動きに内面的な情念の表れを見る思想が広がっていく。その代表例はシャルル・ル・ブランによるアカデミーでの講演録『感情表現に関する講演』(1688)であり、この中で人間の怒りや喜びなどの内面的な情念が顔の表情にどのように表れるのかについて論じられた。この情念という原像と顔の表情という模像の接近性を根拠に、とりわけ18世紀以降、絵画の領域においても演劇の領域においても、身体は情念を真実らしく模倣することができるかと主張され、さらにその模倣表現は分節音言語による模倣よりも勝るとさえ論じられた。しかしメネトリエは1694年の上述の書において、早くもル・ブランの表情論に言及し、この理論を自然模倣論というよりは、自身の隠匿する像理論から全く異なる考察を提示する。それによれば、身体とは内面的な情念を隠し、したがって身体に現れる表情を見る行為とは隠されたものを見抜くことであり、ル・ブランの絵画の卓越性は、「自然の模倣」を目標としているのではなく、隠された「魂を見えるよう」にした点にある。無論、芸術上の一大パラダイムを「模倣」とするこの時代のメネトリエの功績は、他の舞踊論者に先駆けて舞踊による「模倣」の定義に取り組んだことであり、これは18世紀舞踊論に大きな影響を与えた。ただし、本研究から、メネトリエの像理論には神学理論を応用した何らかの対象を隠す、それを見抜くという精神と技の働きから成立する像概念が根底にあり、一般的な原像と模像の一致を志向する模倣理論とは異なった視点で身体による模倣・伝達を捉えていたと考えられる。

デイドロ

バレエ・ダクシオンの動向など、劇における身体言語の使用が本格化する18世紀に、デイドロはいち早く演劇におけるパントマイムの重要性を理論化し、演劇改革を試みた。本課題ではデイドロについて、大きく分けて以下二点について考察した。1) 演劇論を執筆する直前に著された1751年『聾啞者書簡』の中で論じられる言語起源論の分析、2) 「シミュラクル」概念の検討を中心とした1750年代後半の演劇論の分析。

1) 『聾啞者書簡』言語起源論の分析

デイドロが像の指示機能をいかに論じているのかという課題を解くために、『聾啞者書簡』に着目した。その理由は、18世紀における身体の言語化と言語起源論は密接な関係にあるが、デイドロ自身1751年『聾啞者書簡』において、詩的言語を言語の到達点に置く特異な言語起源論を展開しているものの、その身体言語の問題は同時代のコンテクストから検討されるばかりで、内面的にはそれほど詳察されていない。そこでデイドロの言語起源論を詳細に分析し、身体言語の指示機能はいかに論じられているかデイドロの理論から明らかにすることを試みた。

『聾啞者書簡』のなかで、言語が身体という感覚を媒体とする段階から、分節音言語という知性を媒介とする段階へと展開し、明晰性を獲得していく様子が描かれる。ただし一方でデイドロは、同時代の言語起源論の明晰性を到達点とする進歩史観からは距離をとり、分節音言語に至った先に、さらに言語の「完全な段階」を追加する。デイドロはこの段階の特徴として「ヒエログリフ」を定義する。デイドロによれば、言語が感性の段階から知性の段階に進化するに従い、徐々に品詞が完成し、言語は明晰な指示機能を獲得する。しかし言語は明晰性を獲得すればするほど、言語を生成する生き生きとした魂の状態からは乖離し、言語記号という「冷え冷えとした複製」に過ぎなくなる。しかし、芸術作品に起こる詩的な言語活動は、「ヒエログリフ」と呼ばれる像を生成し、この像は言語の限界を乗り越えることができる。なぜなら、芸術家が言語活動のなかに巧妙に仕組む「ヒエログリフ」は、言語の指示対象そのものを言語の受け手に感覚させるといった独特の指示機能を持ち、読み手の魂には、対象を認識する話し手と同じような生き生きとした運動が起こるからである。つまり、ヒエログリフにより言語は、話し手の魂の冷たい「複製」という地位を脱却することができる。複製性という言語の限界から解放されているがゆえに、ディ

ドロはこの詩的な言語を、言語の最も完成された段階として位置付けた。

『聾啞者書簡』から数年後、1760年代後半にディドロは立て続けに演劇作品と演劇論を対にして、演劇に関する著作を発表する。そこで、『聾啞者書簡』の分析に基づいて、演劇における身体言語(視覚言語)の問題にいかに応用されているのか考察した。1760年代後半の演劇論で、ディドロは役者の身体を台詞に還元する古典主義演劇を批判の対象として設定し、パントマイムが大量に導入することで、身体が視覚言語として前面に押し出そうとする演劇改革を主張する。ディドロは、古典演劇の慣例、すなわち俳優が観客を正面にシンメトリーに整列するという慣例は、なぜ改められるべきかを説明するために、絵画と比較しながら、演劇作品の指示対象である行為と生きた人間という媒体の接近を指摘する。人間の行為を「絵の具」という媒体で指示する絵画と、人間の行為を生きている「人間たち自身」という媒体で指示する演劇が比較され、指示される対象と指示する媒体は演劇の方がはるかに接近することが強調される。身体が絵の具に劣らず、むしろ絵の具にまして、描こうとする対象に接近するのであれば、演劇作品において視覚言語「パントマイム」として活用しない理由はない。こうした理念が、ト書き概念が確立していない時代において、大量のト書きがパントマイムを指示する演劇作品『私生児』(1757年)及び『一家の父』(1758年)に結実したと考えられる。このようにディドロは、言語歴史観の完成期の特徴であるヒエログリフにおいて、指示対象そのものを感覚させることで、言語の記号性を乗り越えることが企図したが、このディドロにとって身体とは、パントマイムとして視覚言語化される時は劇の行為(action)という指示対象そのものと限りなく一致し、ヒエログリフの生成の契機である指示対象をいわば現前させることのできる稀有な媒体であると考えられる。

2) 「シミュラークル」概念を中心とした演劇論の分析

上記のヒエログリフ概念に加えて、「シミュラークル」概念の考察を行った。シミュラークル概念は一連の演劇に関する論考の最終章、すなわち『劇詩論』(1758年)の末尾に登場し、ここでディドロはアリストという哲学者を登場させ、アリストの独白という形をとって、近代経験論以後の哲学の困難さを論じる。それによれば今日の哲学の基礎を成すのは、神の知性と不滅とは無縁の有限な人間の身体であり、この有為転変する身体を認識の基礎にして、さらにその対象を、現象的な自然に据えなければならない。ただし、変遷する認識主体と対象という以上の二重の困難にもかかわらず、ディドロは懐疑主義の立場は取らない。流転する身体によって現象的な自然を認識することから、その根本原理や模範の構築が尚必要であると主張し、人間が構築しうる模範を「観念的模範(modèle idéal)」と呼んだ。このディドロの芸術思想の根底にあると考えられる観念的模範は、しばしば芸術制作については「シミュラークル」という特異な術語によって言い換えられる。そこで、ディドロの身体と芸術に関わる本研究課題の解明のために「シミュラークル」概念の分析を試みた。具体的には、演劇論の「シミュラークル」概念を『絵画論』(1765年)に論述される同概念との比較を行った。というのも、演劇論におけるシミュラークルとは流転する認識主体と対象に応じて可変的な制作概念である一方、古代ギリシャ・ローマを主題とする『絵画論』第四章においては、「永続的シミュラークル」という対立的な性質をもつ概念として登場し、この対立を検討することが、この概念の解明に寄与すると考えたからである。

『絵画論』においてディドロは古代ギリシャ・ローマの芸術を分析し、詩人と芸術家(画家や彫刻家)、そして鑑賞者の間には「作用」と「反作用」の関係を認める。ディドロによれば、ホメロスのような詩人が、最初に神々の歴史を描き、この歴史の中で描かれる神々の身体的特徴は、その後の芸術家がこれらの神々を描くときには必ず描きこまなくてはならない必須の特徴となる。なぜなら、芸術家の制作する作品を見る鑑賞者は、ホメロスの描写する神々の物語をいわば聖書として読み、この聖書に描かれる神々の身体的特徴をその神々を主題とする芸術作品に見つけることに快を覚えるからである。このように古代ギリシャ・ローマの芸術は、詩人の描くいわば「異教の聖書」が芸術家や鑑賞者の制作や鑑賞を限定していることを指摘し、こうした三者の「作用」と「反作用」の固定的関係を構築する古代の神々を「永続的シミュラークル」と称した。

以上の「永続的シミュラークル」論の考察は、これと対立する流動的なシミュラークルを論じる演劇論において、ディドロは繰り返し、「われわれ」つまりディドロと同時代人である18世紀を生きる人々を古代人とは神々の信仰という観点において区別して考えていることに着目させる。この演劇論においてディドロは、近代経験論哲学の成果を、古代から続く形而上学の伝統を形而下に転換したこととし、同様の改革を現代の演劇にも求める。ディドロにおいて、もはや地上に神々は存在せず、したがって、古代ギリシャ・ローマの人々が信仰していた神々の描写は、本質的に現代の鑑賞者には適当ではない。ディドロにおいて、現代の鑑賞者の作品への「関心」を本質的に喚起するために要請されるのは、新しい信仰の対象として「ブルジョワ」の生活そのものを描くことである。

以上の演劇作品制作における近代的要請を達成するために、古代ギリシャ・ローマの神々に限定されるシミュラークルを、現代の生を取り込みうる生成的なシミュラークルへと変える必要がある。ディドロは経験論哲学の主要な方法である「観察」を応用し、世界の「観察」、それもとりわけ、職業や感情によって刻々と変化する「人間の身体」の観察に基づいて、芸術家の制作の源泉である「観念的模範」ないし「シミュラークル」を絶えず修正していくことを提案する。周囲の環境や自身の状態に応じて絶えず変化する身体像の観察する近代の芸術家は、そのシミュラークルを変化させることで、彼らを取り囲む世界を芸術作品の中に取り込むことが可能とする。したがって人間の身体とは、永続的なシミュラークルを現代の世界に開かれた生成的なもの

のとし、演劇作品に新たな世界そのものを構築する源として機能していることがわかる。

以上の「ヒエログリフ」および「シミュラクル」概念を中心とした考察は、ディドロの演劇における身体の導入について以下のことを明らかにする。身体を演劇に用いようとする時、その重点は、言語の発信者のメッセージをいかに正確に伝達するかというよりは、言語の受け手である観者の関心をいかに喚起し、またいかに言語の生成に参加させるかという点に置かれている。このことは、パントマイムという身体表現の演劇への導入にあたり、模倣伝達とは別の言語機能をディドロは目論んでいたことを示す。すなわちディドロは身体言語を演劇作品に導入することで、観客に対して一方的にメッセージを放っていた演劇作品を、観客自身が言語の生成に参加する相互的な存在へと改革しようとしたと考えられる。

総括と今後の展望

本研究はメネトリエとディドロという連続的に検討されることのあまりない哲学者を、像理論を背景に身体言語について論じているという共通点に依拠して、相互的な検討を試みた。その結果、メネトリエにおいては「表徴」理論ないし隠匿する像概念、ディドロにおいては「ヒエログリフ」概念に認められる通り、両者の像への関心の根底には、ある表象の伝達性というよりは、表象それ自体の生成に観者がいかに関与するかという問題があり、それが身体言語論に応用されていることが明らかになった。したがって、身体像を言語とする身体言語論へ寄せた両者の関心の背景には、言語の話者と受け手のより相互的なコミュニケーションの追求が認められる。ただし、本研究課題を遂行する過程で新たな考察点も浮上した。すなわち、本性的に制度的であるがゆえに複製性を免れない「言語」表象の限界を越境することへの関心が、この二人の像理論の執筆を導いたとするなら、彼らが身体による演劇を問題にする時、身体の「言語」性というより、むしろ身体が「像」であるからこそ生じる表象の新たな様態を探求していたのではないか。こうした視点は、メネトリエやディドロばかりではなく、この時代の様々な演劇身体論に重要であると考えられ、今後の17-18世紀の演劇身体論考察の軸としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川野恵子	4. 巻 4
2. 論文標題 隠す精神と技 メネトリエ『謎めいた像の哲学』考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 形象	6. 最初と最後の頁 55～69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.18910/75821	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川野恵子	4. 巻 70(1)
2. 論文標題 ヒエログリフと演劇：1750年代のディドロ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 13～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 KAWANO, Keiko
2. 発表標題 Le silence dans le drame selon Diderot
3. 学会等名 Seminaire international des jeunes dix-huitiemistes: Le silence au XVIIIe siecle dans les arts, l'histoire et la philosophie, La Societe Internationale d'Etude du Dix-Huitieme Siecle (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川野恵子
2. 発表標題 ヒエログリフと演劇 1750年代のディドロ
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2018年度 秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KAWANO, Keiko
2. 発表標題 Pantomime in Diderot ' s drama
3. 学会等名 21th Annual Oxford Dance Symposium: Reading Dance (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAWANO, Keiko
2. 発表標題 Pantomime and imagination: Diderot ' s reform of drama in the 1750s
3. 学会等名 15th International Congress on the Enlightenment, International Society for Eighteenth-Century Studies (ISECS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAWANO, Keiko
2. 発表標題 Eveiller l ' interet du public selon Diderot
3. 学会等名 Journee d'etude Scenes publiques, interets privs : L ' interpenetration des systemes de production theatrale (COVID-19の影響で中止。原稿を主催者に送付。)(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>詩とダンスのワークショップ「沈黙の語り」 https://www.facebook.com/events/311522112824902/ Researchmap https://researchmap.jp/k-kawano/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----